

日高 優 編・著

## 『映像と文化——知覚の問いに向かって』

(京都造形芸術大学 東北芸術工科大学 出版局 藝術学舎、2016年)

前田 英樹

まえた ひでき

立教大学 現代心理学部映像身体学科教授 映像身体学

映像身体学科准教授の日高優氏が、この学科で学ぶ学生への贈り物とも言える素晴らしい教科書を出してくれたので、それを紹介しておく。この本、『映像と文化 知覚の問いに向かって』は、京都造形芸術大学通信教育部のために書きおろされたものだが、内容はまさしく〈映像身体学〉の総合手引きとしてそのまま役立つ。

執筆は、日高氏のほかに築地正明氏と荒川徹氏が担当していて、日高氏は主に写真に関わる章を、築地氏は映画、荒川氏はテレビや動画、先端映像に関わる章を受け持っている。とは言っても、三人の論述は視野が広く、深みで交錯しながら、巧みに補い合うといった効果で進んで行く。この種の共著で、これほど息の合った仕事というものは、なかなかないものだ。編者として全篇を統括した、日高氏の努力が大きいのだろう。

全体は十五章で成っていて、三人が五章ずつを分担している。題名にある「知覚の問いに向かって」という言葉は、三人の論述をいつも主調音のように導いている。写真を皮切りに、十九世紀なかばから出現してきた機械映像の本質は、何よりも、それが〈機械による知覚〉だという点にある。当然、機械が知覚する、という言い方には矛盾、あるいは逆説が含まれている。知覚するものは、身体のほかにはないし、知覚は身体が為す行動の一部だと言える。眼による光の制限から顕われる視覚像は、身体の行動にとって必要なものしか示さない。神経組織も筋肉もない映像機械が、もし知覚するのだとしたら、その視覚像は行動から分離して漂う幽霊の仕業ということになってしまう。

実際、初めのうち写真は、そんなものとして近代社会に出現し、人々を意識の底で恐れさせたのである。本書は、映像の持つ力の本質が、いままこの怖れに深

く、徹底して関わっていることを、実に多様な角度から執拗に説いている。機械映像の出現から、そろそろ二百年近くが経とうとするいまでも、私たちの心に生き続けるこの怖れは、まだほとんど精確に指摘されたことがなく、ないからこそ、この手引き書は書かれた、とでもいうようである。

そのような意味で、本書は、機械映像を中心とした視覚の人類史を描き出している。日高氏が何度も言っているように、機械による知覚は、人間の眼と接合されることによってしか、映像とはならない。これは機械映像の弱みを言っているのではなく、それが肉眼から心身の全域に強圧的に流れ込む、その恐るべき性質を言っているのである。

写真の誕生は、視覚の人類史が経験した最大の特異点であることを、日高氏は、「ピンホール（針穴）現象」と呼ばれるものの古代から近代にいたる利用、という歴史事実から見事に掘み出している。ピンホール現象は、中国の春秋時代や紀元前四世紀のギリシアでも知られていたものである。「暗い部屋の片側の壁面に空いた一点の穴＝開口部を通して外界から入ってくる光が、反対側の壁面に外界の倒立像を映し出す」働きをそう呼ぶのだが、「壁面に映る倒立像を流れ去らないように固定させれば、写真のできあがり。写真は、世界に充満する光を感光板が受け取った痕跡を固定させたものなのです」ということになる。

レンズの発明は像を鮮明にして拡大し、感光板の発明がその像を任意の紙面に固定させることを可能にさせた。光学と化学とを応用した二つの近代技術の結合が、ついに写真を生み出した。人類によるピンホール現象の発見から、二千数百年の時を費やしてである。生み出された画像は、もちろん絵画に類似していたが、この類似は紛らわしい外見に過ぎなかった。日高氏は、ジェリコーが描いた疾走する競走馬の姿勢と、マイブリッジが撮影したギャロップする馬の連続写真とを比較し、画家の眼が知覚する運動と、カメラのレンズが捉える運動との間に在る根源的な性質の差異を明快に述べている。

この差異は、どこから来るのか。簡単に言えば、画家はみずからの身体が開く視覚世界のなかに馬の疾走を引き入れて描くのだが、カメラには身体がない。連続写真が捉える馬のギャロップは、充満する光それ自体の異様な圧縮、切断として顕われてくる。前者が示しているのは、身体（画家）が身体（馬）に関わる時の運動の真実だが、後者が示すのは、開かれた世界の全体を、それ自身のなかで啓示する運動の切断、その永遠にして絶対の静止である。

日高氏は言う。「[...]」マイブリッジの写真は瞬間の切断面であり、人間の知覚

のスピードを凌駕し凝結した瞬間ですから、人間の身体にとってのリアルではあり得ません。しかし写真はまた別様に、光の痕跡として無媒介的に世界の実在性に繋がるリアルを宿すのです。機械映像が示すこのような「実在性」は、一方では、視ることの苦痛を強いるほど物それ自体の細部に侵入している。だが、もう一方では、写真は、私たちの身体の外を無限に流れる質料の神秘を直接に知覚させる。そこには、苦痛の代わりに、宗教的とさえ言えるような喜びが湧く。動く写真にほかならない映画の場合でも、このことに変わりはないのだ。

日高氏が、具体例を豊富に、細心に織り込みながら、読者に何よりも伝えようとしているのは、機械映像の出現が、突如として人類史にもたらしたこの〈喜び〉だろう。近代テクノロジーとしての機械映像は、近代社会への言ってしまうばつまらぬ奉仕を目的として、あきれほど多種多様な生産、消費の形態を担わされてきた。その発達の中かで、私たちは、もはや機械映像に対し、持つべき怖れも喜びも持ち得なくなっているのではないか。しかし——と日高氏は書く。「時代がどれほど移り変わろうとも、映像の本質は変わらない。そして、映像が映し出す世界が在ること、それが豊かに在ることも、変わりはない」と。本書が、この信念によって編まれていることは、隅々までの叙述によってはっきりとわかる。映像身体学に就くあらゆる学生に、ぜひとも読んでもらいたい一冊である。